

アジアを 読む

6

マレーシアの 「ルック・イースト」20年 問われ始める効果

イースト政策はもろろん歓迎すべきものではなかった。東南アジアでの日本の存在感や影響力の強化につながるからである。「ルック・イースト政策」の背景は別にして、マレーシア国内にはこの政策の効果について疑問がないわけではない。日本にはあまり伝えられなかったが、政策の存続をめぐりマレーシア内で論争が巻き起こったことがある。97年のアジア通貨・金融危機当時のことである。財政難から留学制度の打ち切り論が急台頭したからだ。

口火を切ったのは当時の起業家育成相である。日本に留学した1200人を対象にした調査では、ビジネスで成功しているのは12人にすぎない。具体的なデータを持ち出して「日本への留学制度の成果に疑問を投げかけたのが発端だった。マレーシア主要紙も、ルック・イースト、お粗末な結果」などと書き立てたものだった。結局、受け入れ国の日本が留学生の派遣費用を無償支援することになり、事業継続が決まった経緯がある。

ことをその時に初めて知った。こうした事実には地元記者からは、ルック・イーストは日本企業への就職予備軍づくりと指摘する声もあった。

今から5年前のことだが、留学生の就職先の構造は今も変わっていないだろう。人材育成は成果が出るまでに時間のかかる息の長い事業であり、「ルック・イースト」の評価に触れるのは時期尚早かもしれない。マレーシア側関係者からも、まだ留学制度が始まって20年。留学した人は幅広い経験を積んでいる時期」と、過大な期待を戒める声が多い。

マレーシアのルック・イースト（東方）政策が今年で21年目に入る。この国費留学制度は、マレーシアの国づくりのために、日本、韓国の経験に学べ」とマハティール首相が1981年末に構想を提唱。翌年から事業がスタート。これまでに約6000人が留学・研修生として日本に学んだ。

経済の低迷が続く今の日本から学ぶべきものがあるのかとの指摘もマレーシア国内にくすぶっていたが、マハティール首相は昨年8月にクアラ Lumpur プールで開かれた、ルック・イースト20周年記念パーティーで、「日本の（成功例と同様に）過ちからも学ぶべきものがある」と継続を表明。日本側をホッとさせた。

この政策をスタートさせたマレーシア

の狙いは明瞭だった。まだ色濃く残っていた旧宗主国である英国の経済・文化的影響力の弱体化と、日本、韓国の経済力を利用しての工業化だった。ルック・イースト構想が発表される直前のマレーシアと英国との関係は、英国資本の「マレーシア国営化問題などでぎくしゃくしていた時期だったことから、マハティール首相の思惑は明らかだろう。

日本、韓国とも政府主導の産業政策と集団的な労働倫理で急速な発展を遂げたことも、西欧的な個人主義を嫌う同首相には好ましいものに映ったに違いない。同首相は83年には日本をモデルに工業化を進めるために「マレーシア株式会社」構想も打ち出している。「お手本」と名指された日本にとっても、ルック・

当時、マレーシアで日本へ留学した多くのマレーシア人に取材をしたが、大きな違和感を持ったのはその多くが日本企業に就職していることだった。留学経験者で組織する、ルック・イースト同窓会「メンバー」の約90%が日本企業で働いている

立心すらなくしてしまつた懸念もある。

国費留学生の日本での経験をどうマレーシア社会に伝えて、経済発展に役立たせるのか。「ルック・イースト」は今、あらたな仕組み作りには迫られているようにみえる。

（日経香港社 奥村幸広）